

## 日本の統一的土壌分類体系（第二次案）

（中間報告（４））

日本ペドロロジー学会第四次分類・命名委員会

Committee for Soil Classification and Nomenclature: Unified Soil Classification  
System of Japan (2nd Approximation) (An Interim Report (4))

### １，はじめに

第４回の土壌分類・命名委員会は３月１８日に明治大学駿河台校舎にて行われました。参加された委員は、菊地委員長、平井委員、小崎委員、中井委員、伊藤委員、橋本委員、田中委員、横井委員、森貞委員、三浦委員、金子（文）委員、金子（真）委員、神山委員、三土委員、永塚委員の１５名でした。自己紹介の後、これまでの経緯が事務局より報告され、１２月４日での会議で議論された内容をペドロロジー学会誌に投稿することが承認されました。その後、各グループから現状報告がなされました。順を追って、議論の概要を紹介させていただきます。

### ２，未熟土壌グループ・石灰質土壌グループ・造成土壌グループ

未熟土壌グループの分類・命名案、石灰質土壌グループの分類・命名案が報告され、未熟土壌グループのキーアウト順と、石灰質土壌のうち未熟土壌グループに入る土壌と、そうでない土壌との区別が可能か否かについて議論されました。この議論をもとにして、今一度、未熟土壌グループの案を整備することとなりました。さらに、造成土壌グループからの報告に基づいて議論されましたが、造成土の定義について十分な情報が得られないことから、次回以降に詳細な議論が持ち越されました。

### ３，火山性土壌グループ

分類・命名案の中で用いられている、非アロフェン質という言葉とペドロジスト懇談会土壌分類・命名案（１次案）（ペドロジスト懇談会 第一次土壌分類・命名委員会 1986）の中で用いられている、準黒ぼく土の「準」という言葉について議論が交わされました。一次案で用いられている黒ぼく土の中心概念は、そのコロイド組成がアロフェンを主体としている土壌であり、準黒ぼく土は、「para」黒ぼく土の訳語であって、２：１型の粘土鉱物を含む黒ぼく土（非アロフェン質と原案では示されている）に相当するとのことでした。日本ペドロロジー学会統一的土壌分類体系（第二次案）で用いられる、土壌名に関しては、一次案で用いられた土壌名を尊重すべきであるとの意見が提出されました。本案において、火山灰母材の褐色森林土は、黒ぼく土として分類されますが、生成的特徴の中に、従来の定義である「黒色表層」以外に「褐色表層」をもつ土壌も含まれるように、修正を施すように提案されました。以上の意見を参考にして、黒ぼく土の分類・命名案を修正す

ることになりました。また、湿性の特徴をどのように定義するかについて、低地土壌グループの定義をできるだけ用いる方向で修正することになりました。

#### 4 , 低地土壌グループ・台地土壌グループ

低地土壌グループでは、中間報告(1)の低地土壌グループ案の修正点が紹介されました。沖積土壌物質の定義のなかで、1万年より若いという表現を入れるべきであるとの意見や、未熟土壌との差異(生成的特徴)を明確にすべきであるとの意見が提出されました。また、水田土大群を設けることの是非について議論され、水田土壌化作用が働いている土壌の一群を土壌大群としてまとめるよりもむしろ、各土壌大群や土壌群の中で、「水田化」群や亜群として、位置づける方が望ましいとの意見が提出され、土壌大群から「水田土」を除くこととしました。また、水田土はWRBでは「Anthrosols」に分類されるのではないかとの意見も提出されましたが、集積水田土、灰色化水田土、灰色低地土、褐色低地土、グライ土の5つの土壌群を取りとめて、「沖積土」とすること暫定的に承認されました。

次に、台地土壌グループからの分類・命名案が紹介されました。ここでの論点は、湿性台地土という名称についてでした。山地においても、グライ土と同じような断面形態を示す土壌が存在していることから、「台地」という言葉は不適切との意見が提出されました。このため、様々な名称が委員から提出されたが、「グライ土」という名称を仮につけて議論を進めることになりました。停滞水グライ土、疑似グライ土の亜群についても議論されました。

#### 5 , 林野土壌グループ

土壌名を一次案で用いられている褐色森林土、黄褐色森林土や赤黄色土という名称を用いないことに対して異論が唱えられ、一次案で用いられている土壌名を用いることになりました。また、これらの土壌名に対して新しい定義を付すことが提案されていましたが、現場において断面形態から土壌を分類できるような工夫を施す必要があるとの意見や、むしろ現場判断がつくような基準を用いるべきとの意見も提出されました。世界的な土壌分類の趨勢は、定量的基準を用いているため、やはり定量的基準を付すべきであるとの意見もあると同時に、定量的基準と断面形態による基準は相容れないので、どちらをも満足させる基準づく理は事実上不可能であるとの意見が提出された。WRB(FAO 1998)の分類のなかでは、土壌を分類する際に定量的基準が決められているが、これと同時に"Field Identification"が設けられることによって、土壌調査時に分類名をほぼ特定できるように工夫が施されていることが紹介されました。現場判断可能なように工夫を凝らし、かつ定量的な分類・命名を創ることが必要であるとの意見が提出されました。林野土壌グループの分類では、定量的基準とともに、Field Identificationを付記することで調整することとなりました。土壌大群における、ポドゾル性土、褐色森林土、黄褐色森林土、赤黄色土の位置づけについては次回以降の委員会で議論することになりました。

#### 6 , その他

現在の委員の任期は2年間で、2000年3月31日で任期が切れます。今後、本委員会の継続の是非について議論がなされました。菊地委員長から、現在の進捗状況はかなり良い線まで来ているので、もう2年間継続したい旨の提案がなされました。委員の構成メンバーは現行の委員にさらに新しい方に入っていただく方向で調整することになりました。

以上、第4回分類・命名委員会の概要を紹介させていただきました。日本の土壌を低地から山地まで概観できるような分類・命名案作成を目指しています。会員の皆様からのご意見をお待ちしております。

連絡先：〒321-8505 宇都宮市峰町350 宇都宮大学農学部 平井英明

E-mail: [hirai@cc.utsunomiya-u.ac.jp](mailto:hirai@cc.utsunomiya-u.ac.jp),

FAX: 028-649-5401